（メッセ海外通信 2013年1→3月号掲載記事）

～ソウル市長は大の日本通！～

下関市総合政策部国際課
（釜山広域市派遣職員）
高野　良之

先日（財）自治体国際化協会ソウル事務所を通じて、日本の他自治体から韓国に派遣されている職員と共に、朴元淳（パク・ウォンスン）ソウル市長（以下「パク市長」）を表敬訪問させていただきました。

パク市長は、人権派の弁護士として活躍するとともに、市民活動家としても韓国を代表する一人に挙げられるほどの方で、２０１１年１０月よりソウル市長を務められています。周りの方にお話を伺うと、将来の大統領候補の一人にも挙げられているそうです。市長室に入るとパク市長自らお出迎えいただいたのですが、その時に「ようこそお越しいただきました」と流暢な日本語でご挨拶していただいたのです。市長が日本語を話すことができるとは全く考えていなかったため、大変驚きました。日本語は以前、必要に迫られて独学で勉強されたとのことでしたが、日常会話は日本語で全く問題ない程の素晴らしい日本語でした。

市長室の雰囲気は、他の自治体の市長室とは明らかに異なるものでした。机や棚はすべて廃材をリサイクルしてつくられており、それがとても市長室に柔らかいイメージを与えることに役立っているように思えました。

パク市長の机を見るとおびただしいほどの書類の山で、これを見るだけでもとてつもない仕事量であることがわかります。これらの書類すべてに目を通した後で、自らが項目別に色分けしてファイリングするそうです。ファイリングについては日本人が上手だから見習うようにしているとおっしゃっていました。また、机の後ろにある棚が傾いているように見えますが、これは目の錯覚ではありません。右と左に傾いた棚を真ん中の棚で支えているようにデザインされています。パク市長も、このように２極化した社会を調整するような役割を果たしていきたいという思いから、この本棚を置いているとのことでした。

市長室には日本の書籍もたくさん置かれていましたが、その中から何冊か取り上げ、自分がなぜこの本を読んだのかということについて説明していただきました。物事を解決する際に必要な場合には、このように日本の書籍から勉強することも多いということです。

パク市長は基本的なスタンスとして、市政に何か問題があればまず現地を見てから考えるそうです。現在、ソウル市では、いわゆる「ぼったくりタクシー」の撲滅に取り組んでいるのですが、調査するに当たり、市長自らが日本人観光客に扮し、タクシーに乗り、日本語で会話しながら、ぼったくりがないかどうか調べたそうです。このような話を聞くと、本当に体がいくつあっても足りないのではないかと思ってしまいます。

最後に、ソウル市政についてお話を伺いましたが、「とにかく、市民がどんなときにも笑顔が絶えないような街づくりをしていきたい」と言われたのが一番印象的でした。

一般的な市長とは違い、とても柔らかい雰囲気を持ちながらも、市民のために身を粉にして職務を全うする姿勢を持つこのパク市長の今後には、これからも注目です。